

閑遊（大窪詩仏）

淡靄 微風 雨後の天

閑遊 時に 復 江辺に 向う

落花 我に 於いて 何ぞ 輕薄なる

飛絮 人に 比すれば 尤も 放顛

詩漸く 平に 到るは 淡を 愛するに 因り

酒聊か 量を 減ずるは 是れ 年を 添うるなり

近來 自ら 覺ゆ 春 味い 無きを

一醉 昏々として 只 眠らんと 欲す

淡靄微風雨後天 閑遊時復向江邊
落花於我何輕薄 飛絮比人尤放顛
詩漸到平因愛淡 酒聊減量是添年
近來自覺春無味 一醉昏昏只欲眠

解説 この詩は作者が晩年に江戸を去り、秋田藩に仕えてから作ったものと考えられる。

語釈 ※淡靄Ⅱうす靄。 ※雨後天Ⅱ雨あがりの空。 ※閑遊Ⅱのんびりと遊ぶ。

※於我Ⅱ私にとつて。 ※落花Ⅱ花が散る。 ※輕薄Ⅱ考えがあさはかで、言動に慎重さを欠くこと。 ※飛絮Ⅱ風に舞う柳のわた。 ※比人Ⅱ人に比べて。 ※尤Ⅱ態度や様子が普通と変わって悪く、はなはだしい。 ※放顛Ⅱ正常でない。 風狂なさまをいう。 ※漸Ⅱだんだんと。 すこしずつ。 ※到平Ⅱわかりやすくはつきりしていること。 ※因愛淡Ⅱ平明な詩境に到ったのは淡泊になったことが原因。

※聊Ⅱわずかばかり。 ※添年Ⅱ年を重ねる。 ※近來Ⅱ近頃。 ※自覺Ⅱ自己認識。 ※春無味Ⅱ春に面白味を感じない。 ※一醉Ⅱひとたび酒に酔うと。 ※昏昏Ⅱ意識がないさま。 酔つてももうろうとなつたさま。

通釈 うす靄がたちこめ、そよかぜが吹く雨上がりの空、のんびりと散歩を楽しもうと江辺に足を向けた。 私を待たないで花が散ってしまうとは何と輕薄だ。 また、風に舞う柳のわたは人と比べてさらに風狂である。 この頃作る詩がようやく平明になったのは、淡泊を愛するようになったからだろう。 酒もまた、量を減じたのは年を加えて老境に到ったからだろう。 近頃は、春に面白い味わいを感じなくなってきたので、ひとたび酔うともうろうとなり、眠ろうと思うだけである。